

第二百八十八回 青葉会

平成二十二年三月二十五日(木) 午後六時〜九時

丸紅一階レストラン「談話室」

〈選者〉 ☆川合万里子 先生

〈出席者〉 今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 小西弘子 豊田ゆたか 山崎亜也

山内天牛 渡邊盛雄

〈投句〉 伊賀山そらお 石川清 佐野明彦 朱牟田恵洲 土谷堂哉 橋口隆 福島正明

南平和夫 宮内規雄

〈紙上選句〉 赤田堅 伊賀山そらお 川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 福島正明

村田くに子 山崎陽亮 山本三恵

《選者吟》

内定を確かめる子や木の芽晴

悲史秘めし神樹を倒し春嵐

収支合ひ月真ん丸の二月尽

想ひよりきまりを守り戻り寒

二回り若き友逝き霾曇(よなぐもり)

万里子 (そ・猛・忠・孤)

全 (猛・恭・ゆ)

全 (紀)

全 (龍)

全 (紀)

ゴシックは選者の天

《互選句》

☆浜風や路地の軒端の干鰯

ゆたか (万・そ・恭・孤・敏・允・正・く
亜・陽)

七点

衰へは静かに来たり内裏雛

盛雄 (忠・孤・弘・ゆ・亜・陽・天)

(陽：情景がよく見える。中七がいい。潮の香も漂う)
(陽：衰えを知らぬ内裏雛と年々衰えを見せている自分の容姿の対照がいい。但し中七に一工夫欲しい。例えば↓衰えは猫の足にて内裏雛)

六点

☆春寒や字に震えある師の葉書

恵洲 (万・猛・忠・敏・允・盛)

(☆↓文字震ふ恩師の葉書春寒し)

五点

☆電気ブランの酔い甘たるき朧月

全 (万・そ・恭・正・三)

四点

山門で空空空(くうくうくう)春の鳩

忠彦 (そ・陽・三・盛)

(陽：山門だから色即是空の世界に入る門。そのの鳩が空空空と啼く様子が分りやすくいい。但し中七が字足らずなので「空空空と」にする)

謡本かすみで読めず梅若忌

明彦 (堅・猛・正・三)

☆花曇り母の遺作の抹茶茶碗

ゆたか (万・堅・孤・盛)

(☆下五↓抹茶碗)

春泥(なづ)み触感しるきジャワ更紗

亜也 (ゆ・正・く・天)

寸法のあはぬ大工や老の春

天牛 (堅・ゆ・三・盛)

白梅や師匠の紅唇艶めきて

紀久男 (恭・敏・三)

つちふるや伊勢丹一瞬華語の哄

忠彦 (紀・弘・龍)

歌舞伎座のいよよ見納め花灯り

弘子 (紀・允・盛)

花の香も潮の香まじり島の春

ゆたか (堅・猛・く)

☆ふるさとの春あともどり渡し舟

全 (万・そ・天)

春嵐色紙に別れの言葉書く

隆 (堅・孤・敏)

霾(ちぢむ)るや不満分子はあちこちに

正明 (紀・陽・天)

(陽：黄砂を降らせる国には不満分子が満ち満ちているという。そうした中国の現状を窺わせる句になっている)

☆しやぼん玉幼児手を伸べ転げけり

規雄 (万・龍・天)

(☆幼児↓幼な)

二点

登校を急ぐ母子や春の雪
歌舞伎座に京ことば聴く春の宵
春宵や蘇州夜曲もジャズ風に

(クラーク飛行場)

そらお (紀・く)
紀久男 (敏・正)
全 (龍・亜)

日米の激戦場やミモザ咲く
春霖や逸(はじ)る外出儘ならず

全 (正・天)
恭延 (紀・く)
全 (允・亜)

観音像見上ぐる駅に春兆す
啓蟄や地下鉄乗って四ツ谷駅

忠彦 (弘・亜)
弘子 (紀・く)

ささやかな納得ありて桜貝
踏青や手にキスをして過ぎる犬

全 (忠・亜)
全 (万・忠)

☆ 子供等を蕾で送る桜かな
春愁や黄ばみし夕べへツセ読む

規雄 (猛・弘)
全 (万・忠)

☆ 花菜盛る万暦年製金欄手

(陽：16世紀の中国製の陶磁器に菜の花を盛る贅沢が羨ましい。但し、盛るでは景が見えない
ので挿すがいいと思う)

☆ 建替ふも老紅梅の生き残る
☆ 居間に咲くレモンの花に受粉させ

全 (万・堅)
天牛 (万・ゆ)

イタリヤへお悔みを書く彼岸かな
花の冷吉野の里のかくし酒

全 (弘・三)
盛雄 (敏・ゆ)

長閑なる山を歩いて里の茶屋

清 (陽)

一点

(陽：漱石の草枕の世界。結句は峠茶屋がいい)
幕上がり力み消へずや春の雪
芽ぐむ花幸せ色にあたり染め
息を呑む闇夜にうつすら白木蓮

紀久男 (恭)
猛 (龍)
全 (そ)

(夜は不要)
春浅し臨海工場蒸気吐く
空覆ふ黄砂の旅や何処まで

恭延 (盛)
全 (允)

墓前にて治饗酒を飲み耳すます
桜餅二つ買ひ来て夕餉とす

忠彦 (弘)
明彦 (紀)

雪原の求愛ダンス春隣
六甲の風を背中に春の海

堂哉 (龍)
ゆたか (允)

春疾風勝鬨橋は閉じたまま
大乱の兆ならずも黄砂降る

正明 (忠)
亜也 (孤)

☆ 水温む瀬に笹舟の昭和かな
花の夜のひとり滲(にじ)みてカプチーノ

盛雄 (万)
全 (恭)

●次回青葉会

四月二十二日(木) 午後六時〜九時
五月二十七日(木) 全

(丸紅・談話室)
(全)

▲当季雑詠各自五句。投句は二句

△今年度年会費を集めます

以上文責

紀久男

第二百八十八回青葉会後記（平成二十二年三月）

一、今回は伊丹から上京された盛雄さん始め10名出席。9名投句。盛雄さんいつもの大阪土産・
・・・瀬戸内海の春を告げる鮎子（いかなぎ）の釘煮。先生お手製の五平餅、弘子さんの「八海山」
小生の「久保田・千寿」忠彦さんの焼酎と左党好みの逸品が揃い、いつもの如く大いに呑み食い
して盛会となりました。ゆたかさんの披講と合評の捌きもスムーズに運び、御覧のようにゆたか
さん盛雄さん恵洲さんが好成績でした。紙上選者の堅さんから「今回は秀作ぞろいでした。脱帽
です」との過分な御高評を頂戴しました。

◎盛雄さんの七点句「衰へは―」の句は句会席上ではトップでしたので、敬意を表して終了時に
皆さん拍手・・・かつて無かつたことです。

◎弘子さんの二点句「桜貝」に因んで先生が「桜貝の唄」を口遊くちうぎされました。

◎明彦さんから小生へのお手紙を先生や天牛さんらに回覧しました。三月末から一週間再入院さ
れる由で、皆さん御快癒を願っておられました。

◎一年後に三百回の節目を迎えます。その記念行事・・・合同句集、関西吟行（花見と吉兆）
が話題となりました。好い企画ございましたら御遠慮なく提案願います。

●当会発足時のメンバーの一人である村岡英樹さんが三月十九日に急逝されました。（七十三
歳）。和夫さんと同窓同期入社で、小生を俳句の世界に導いて頂いた先輩です。酒とカンツオ
―ネを愛した故人を偲びグラスを傾け、恭延さんに「千の風になつて」を熱唱して頂きました。
村岡さんを知る各位から追悼句を募ることになりましたので、お寄せ願います。
●久米五郎太さんの奥様佳子さんが三月三十一日に急逝されました。お悔み申し上げます。
（六十三歳）

二、関係者近詠

地震に覚め未明の星の冴え冴えと	万里子	葦牙や流るともなく水流れ	允章
交々に婚家実家の雑煮かな	全	鳥雲に入りて漸く湖暮れぬ	全
児と目守る栗鼠の穴掘り冬日和	全	天空を風の鳴るなり花木五倍子	全
熱き湯をポットへ注ぎ足し除夜の鐘	眞希子	要するに不精なだけか残り鴨	陽亮
寝坊助の一番早起き大旦	全	花筵和して同ぜぬ拱手かな	全
初泣きをどうなだめても母を追ふ	全	黄砂降る成吉思汗の里帰り	全
競ひ合ふ年子の初凧はやもつれ	全	金井先輩を悼む	
笹鳴きや困ひの低き露天風呂	弘子	清らなるテナーとこしへ椿落つ	堂哉
待ち兼ねし友の新刊日脚伸ぶ	紀久男		
大寒の空晴れ渡りバス来たる	恭延	間歇の高き湯柱遠雪嶺	孤舟
冬茜買ひ物帰りの坂の上	全	草食系男子の貌のかじけ猫	全
若水で顔を洗ひと絵日記に	和夫	冬満月夙志の途の半ばなり	全
二歳児と模型動かす老いの春	全	碧天へ膨 <small>ふくら</small> むサリ初詣	全
――『萬緑』4月号――		私心捨て無心となれず七種粥	全
		――『遠嶺』4月号――	

○ 浮気のひとつもたまにはおしとたまにはお言いよねえお前 恵洲

〔NHKラジオ折込都々逸「うたたね」〕

☆この頁は一月から忠彦さんをお願いします。今迄御担当の本田博昭さんはヘルニアによる腰痛の為交代されました。有難うございました。

平成二十二年三月十三日

紀久男記